2018年3月15日 台湾研修5日目（ジェンダー・セクシュアリティグループ）

婦女新知基金会

青木 風香

戒厳令下の中華民国は大陸の中華人民共和国に対抗するため儒教規範に則った教育を行っていた。そのため「結婚したら妻の財産は夫のもの」「親権は父親のもの」など長い間女性の権利は抑圧されていた。しかし1980年に戒厳令が解除されて以降、民進党の躍進と共に民主化が一気に進展。その際に女性運動の先頭に立ったのが今回訪問した婦女新知基金会である。

この団体は1982年に設立された婦女新知雑誌社を前身としており、1987年に改名された。80年代後半から90年代にかけてドメスティック・バイオレンスや原住民女性の人身売買、セクシュアル・ハラスメント、男女の労働格差など様々な問題に取り組んできた。ここからは主に「フェミニズム」と「セクシュアルマイノリティ」に分けて説明する。

まず前者であるが、元々女性は就職時に「30歳になるとき或いは結婚時に退職する」という雇用契約を結ばされるなどの不当な扱いを受けていた。そこで婦女新知基金会は1989年に性別工作平等法(日本語でジェンダー平等労働法)の草案を作成。2002年に陳水扁が民進党として初めて相当になると早速制定された。これは職場での待遇の男女差別やセクハラ
禁止し、更に最長2年間の育児休暇を性別に関係なく取得できることを定めた。婦女新知基金会が初めて法律制定に関わった画期的な事例である。

また、1996年に婦女新知基金会のメンバーで民進党議員でありクォーター制を提唱していた女性がレイプされた上で殺害されるという残虐な事件をきっかけに50万人を越える女性たちの大規模なデモが発生すると、1997年性暴力禁止法、1998年DV防止法が成立。これらをふまえ、基金会は次第に選挙戦に介入し政党との関わりを重視するようになっていった。

1996年陳水扁が台北市長になった際には下位組織として婦人団体を設立。その後他の都市や政党もこれに倣ったため、政治に女性の声が届きやすくなった。

次に後者のセクシュアル・マイノリティに対する活動について述べる。欧米留学からの帰国生がフェミニズムと同時に知識を持ち帰り、80年代後半には台湾の大学でもジェンダーに関する授業が開始され、特に女性の性解放を唱える人々が同性愛運動にも貢献していく。やがて初めての同性愛団体であるbetween usが誕生し、婦女新知基金会メンバーの中にも参加する者が現れるが、まだ同性愛に対する偏見が根強い時代であったため、それを公に言える雰囲気ではなかったという。

1998年陳水扁が日本統治時代の名残である「公娼制」の廃止を宣言すると婦女新知基金会は賛成派(性解放を唱える。セックスはスティグマではない)と反対派(資本主義下での女性性の商品化・売買を認めない)に分かれ賛成派は婦女新知基金会から追放され、セクシュアル・マイノリティ運動を率いていくことになった。

2004年SOGIによる差別の禁止を定めたジェンダー平等教育法が制定され、やがてジェンダー平等労

働法も男女差だけでなくSOGIによるものに改正された。2006年には民法の女性に対する差別条項の消去が一段落し、婦女新知基金会は同性婚の成立を次なる目標に据える。2012年には100万人署名運動やゲイカップル婚姻届受理拒否事件など同性婚運動は大きな盛り上がりを見せた。しかし2013~2016年にかけて反動も激しくなり、反同性婚の署名が27万人も集まった。しかし2016年にFacebookで同性婚に賛成した蔡英文が国政選挙で当選、それに合わせ婦女新知基金会も立法院に草案を提出した。この際、「夫」「妻」ではなく「配偶者」のように性別がはっきりわからない言葉を使うよう注意を払ったという。しかし「他の全ての法案についても用語を直すとコストがかかる」「子供から『お父さん』と呼ばれなくなる」「『妻』としてのアイデンティティが失われる」などバックラッシュも大きかった。そんな中2016年末には立法院で同性婚草案が可決され、2017年5月20日には大法官が現行の民法を違憲とし、2年以内の改正を命じた。こうして台湾で同性婚が成立するのはほぼ確実なものとなった。

これからの目標を尋ねると①姦通罪の撤廃、②不妊治療に関する法律制定、③男女所得格差・財産相続での男子優遇の改善に関して意欲的な姿勢を示した。

日本には婦女新知基金会のように政治の中に入り込んで法律の制定にも関わったような強力な婦人団体は存在しない。従って現在でも根強い性役割分業や昇進・進学での男女差別が残っている。セクシュアル・マイノリティに関しても台湾に比べ大きな遅れをとっていると言わざるを得ない。日本国民は「自分たちで政治を変えていく」という意識が弱い。台湾の先進的な民間団体から学ぶべきものが多いように感じた。

2018年3月15日 台湾研修5日目（文学グループ）

台湾文学①赤松美和子先生にお話を伺う

西田 尚

本日は、阿古先生のご紹介で、大妻女子大学の赤松美和子さんにお会いした。赤松先生は、台湾文学の研究者で、現在台湾で一年間の研修をされている。

赤松先生とは、台湾を実際に訪れる以前からメールのやり取りをさせていただき、赤松先生のブログのおすすめの記事を教えていただいたりした。赤松先生は、その記事において、台湾文学が「ハイブリッド文学」であると言っておられる。その実は、台湾文学が、国家・言語・文学が一対一で対応する近代文学とは異なり、多元性を有するという事である。台湾文学は、台湾が清朝・日本・国民党政府に支配され、それぞれの文化政策に影響された中で、世界の文学に類を見ない独自性を獲得した。以上の前提知識を踏まえた上で、本日、赤松先生にお会いして、お話を伺った。

赤松先生とは、午前九時半に古亭駅六番出口で待ち合わせをさせていただいた。しかし、残念ながら私の不手際で約束の時間に遅れてしまった。時間通りに目的地に到達出来なかった事が悔やまれる。

赤松先生は、私を連れて、古亭駅六番出口から地上に上がられた。その後私に、紀州文学庵の日本統治時代の地図を渡され、二人で古地図を見ながら、日本統治時代の街並みの面影を辿った。始めに訪れたのは、了覚寺というお寺。このお寺は光復以降改修されたため、かつての名残は見出せなかった。了覚寺を出た赤松先生はゆっくりとした足取りで歩かれ、私は先生のすぐ後に寄り添い、先生の柔らかな口調に耳を委ねた。先生がおっしゃるには、昨今、日本では台湾の親日派だけが紹介され、日本統治時代が、台湾の近代化を促進したという好意的な側面からのみ理解される傾向があるのは危険であり、台湾を正しく理解する事が必要である。そのために赤松先生が書かれたのが、『台湾を知るための 60 章』である。私が阿古先生からのお言付けを忘れずに、我々研修のメンバーが『台湾を知るための 60 章』を購入した事をお伝えすると、先生は喜んでいらっしゃった。先生は次に、紀州文学庵について言及された。紀州文学庵は 1917 年に建てられ、当初は日本料亭だった。先生は私を紀州文学庵の側の川辺に案内され、「あの川に屋形船を浮かべて、お客さんをもてなしたんだそうですよ」とおっしゃった。日本料亭は戦後、公務員領として使用され、1950～1960 年代になると、台湾の文壇に大きな影響を及ぼす文学人・文学集団の拠点であった。赤松先生は、台湾でこうした日本統治時代の建築ばかりが台湾文学館とされている事に関して、こうした傾向は、戒厳令が解除されるまでその歴史が語られる事のなかった台湾文学に、歴史性を賦与したいという意図の表れであると指摘された。また、こうした傾向には行き過ぎな面があり、近いうちに、こうした台湾の文学館のあり方が見直されるだろうとおっしゃった。赤松先生の後に続いて文学庵の中に入った。文学庵では、台湾の詩人、余光中がつい最近亡くなった事を受けて、余光中特集を組んでいた。余光中特集を見終わった後、赤松先生は戦後台湾文学について語られ始めた。

戦後台湾が光復し、国民党政府が台湾を支配し始めると、国民党政府は北京語の普及に力を入れ、ま

た、中国語の作文の授業を導入したりした。この背景には、国民党が国共内戦に敗北した理由が、共産党が文化政策を重視したのに対して、国民党は文化政策を軽視した事に帰せられたという事がある。台湾に逃れた国民党は、日本統治時代の文化政策を全否定し、中国語で読み書きする人々の育成に努めた。しかし、日本の教育を受けた本省人にとって、すぐさま中国語で作品を書くのは不可能であった。1950年代に台湾文学を支えたのは、外省人の御用作家で、こうした作家の手になる作品は、反共イデオロギー・大陸への郷愁を必然的に備えていた。このようにして、ある特定のイデオロギーを前提として文学作品が書かれるのは、現代まで続く、台湾文学の大きな特徴である。赤松先生は、こうした台湾文学の性格を、「動的」であると言われた。例えば、台湾では文学キャンプが行われ、作家達が同じ場所で寝泊まりし、議論を重ねる中で作品を書くという伝統がある。これに加え、以前の台湾の中学高校では、学校ごとに文芸誌が作られ、時に作家が学校に滞在して創作活動の指導が行われていた。赤松先生は、こうした「動的」な創作活動を、文学の集団化、すなわちイデオロギーを背負ったものとして文学作品が存在する事であると指摘された。日本では言うまでもなく、現代の台湾でも、文学は個別化しつつある。しかし、それでも台湾文学の「動的」な性格な今なお残っている。その証拠として、台湾で毎年開催される文学フェスは大盛況で、現代台湾文学を代表する多くの作家が文学フェスに参加する。

赤松先生は最後に、台湾の作家と日本の作家の違いに言及され、台湾の作家は作家であるのみならず、文学研究者である事が多いが、日本の作家は、専業作家である事が多いと指摘された。

赤松先生は以上の話をし終わりなさると、私を文学庵の外に誘い、文学庵の側のブックカフェに連れて行って下さった。ブックカフェには台湾文学史上重要な作品が集められ、また、現代台湾で話題の作品も販売されていた。赤松先生は私に本を一冊買って下さり、感謝の至りであった。

その後、赤松先生と私は、同じく台湾文学を研究されている二人の研究者の方々と合流し、客家料理の店に昼御飯を食べに行った。研究をして生きる女性の悩み、研究と家庭の両立、授業をする辛さなど、齢19歳の若造である私には理解の及ばない話が飛び交ったが、普段耳にしない話を伺い、大変貴重な体験をさせていただいた。赤松先生からは、今後の研究の目標を教えていただき、そのお志の高さに胸を打たれた。客家料理はやや味が濃かったが、概して美味しかった。

赤松先生はお嬢様を迎えに日本人学校に行かれるとの事であったので、細い裏道を通り抜けたメインストリートで、お別れをする運びとなった。赤松先生にはこの日大変お世話になり、感謝の念が全身を支配した。

2018年3月16日 台湾研修6日目（文学グループ）

台湾文学②伊格言さんにお話を伺う

西田 尚

本日は台湾の作家、伊格言さんにお話を伺った。伊格言さんは独特な御経歴を持っていらっしゃる方で、心理学・医学・文学を勉強された。伊格言さんは『グラウンド・ゼロ 台湾第四原子力発電所』を書かれ、数々の文学賞を受賞され、日本語にも訳された。私は今回、伊格言さんにお会いする事が決まってから、『グラウンド・ゼロ』を読んだ。この作品はジャンルで言えば、近未来のディストピアを描いたサスペンスだ。作品はタイトルの通り、台湾の第四原子力発電所が事故を起こすという話で、事故の日を「グラウンド・ゼロ=爆心地」とし、それ以前の世界を「アバブ・グラウンド・ゼロ」、それ以降の世界を「アンダー・グラウンド・ゼロ」とする事で、二つの世界が一つに繋がる緊迫感を演出している。

伊格言さんにお会いするに当たり、こちら側のお聞きしたい事を伊格言さんにお伝えした。質問は3点あり、以下の通りであった。一つ目は、原子力発電所の近くで暮らす人々について、どのようなお考えをお持ちであるか、二つ目は、伊格言さんご自身は、文明社会についてどのようなお考えをお持ちであるか、三つ目は、日本の原発政策について、どのようなお考えをお持ちであるか、である。

伊格言さんとは、16時30分に青鳥書店でお会いする約束であった。青鳥書店は、落ち着いた雰囲気の、お洒落なブックカフェであるが、青鳥書店に関しては、富澤さんが詳しい論考を発表なされているので、そちらを参照されたい。同行した同学は小林と村永で、阿古先生と金さんが付き添って下さった。金さんは、台北在住の弁護士でいらっしゃり、東京大学出身で、大変気さくで深い教養をお持ちの方である。私は、高名な作家にお会いするのが始めてであり、伊格言さんにお会いする直前は、やや緊張していた。青鳥書店に入ると、伊格言さんは既にいらっしゃり、手持ち無沙汰に店内を見回しなさっていた。阿古先生がご挨拶をして下さり、その後急いでインタビューのための席を準備させていただいた。我々は、伊格言さんがソファーにお座りになる事を提案させていただいたものの、伊格言さんは、「君達の顔がよく見えるように」とおっしゃって、小さなパイプ椅子にお座りになった。伊格言さんはタイのミルクティーを注文なされていて、それが大変美味しそうだったので、我々も同じものを注文した。

まず始めに我々学生3人が自己紹介をさせていただき、続いて、伊格言さんに様々な質問をさせていただいた。それらの一切とそれらに対する回答を記すのも良いが、時間の都合上、ここでは、私の特に印象に残った受け答えの内容をまとめたい。詳しい議事録をお求めの方は、私に言っていただければと思う。

伊格言さんが『グラウンド・ゼロ』を書かれるに当たり、初めは、人々にもっと原発の問題に関心を持ってもらいたいという動機があった。ただ、次第に、原発事故のストーリーを媒介として、読者が、必然だと思い込んでいる多くの事は偶然でしかないと理解し、自分の生活を見直す事を促すような小説を書きたいという動機が加わった。この、「文明は偶然の産物である」という考えは、伊格言さんご自身のお

考えでもあり、そうした文明社会に生きる我々は、恣意的であると感じられる自分の考えでさえ、偶然に左右されるのだという事を言っておられた。何かが偶然に左右されるという事は、未来が確定ではない事を意味する。伊格言さんがおっしゃるには、文学や芸術の力とは、社会の「可能性」を提示する事である。確かに、未来が正確に予測され、進むべき道が一つに定まっている時、人は安心するが、そうした人達の耳元で鐘を鳴らし、時に危険の可能性を、時に希望の可能性を知らせるのが文学や芸術であるのだ。

また、日本の小説に、台湾の小説に比べて、社会問題を扱った小説が少ないように感じられる事に関して、伊格言さんは、台湾は民主化してからまだ日が浅く、取り組むべき社会問題が山積しているためであると言っておられた。社会問題の解決のために小説家が小説を書くのは、小説が一種のメディアである以上、社会運動に似たことであると言える。伊格言さんは、原発廃止を訴える集会に出席されていた事があり、社会問題に深いご関心を抱かれている。また、伊格言さんは、「そうした社会問題を論じなくて良いのは日本にとって幸せな事だ」とおっしゃっていた。しかし、伊格言さんとお別れした後、東京大学の先輩で、台湾研修に同行して下さっている玄野さんとお話しした際に、この伊格言さんのご発言に始めて違和感を抱いた。すなわち、伊格言さんの言われた「幸せ」とは、社会問題を暴かれずに済む国家にとっての幸せであるとか、厄介な社会問題から目を逸らして生きていく事ができる幸せといったものであるのではないか、という事だ。そして私は、そうした幸せは、決してあるべき幸せの姿ではないと感じた。私が思うに、日本は、伊格言さんが言われたような、ずば抜けた課題先進国ではない。この台湾研修を通じて、原発政策や、LGBT に関する政策では、台湾は日本の先を行っていると痛感した。最早、日本が台湾に一方的に何かを教えてあげる時代は終わりを迎えたのかもしれない。これからは、日本と台湾が共に教え合い、両国共通の課題の改善・解決を図るべきかもしれない。

本日、伊格言さんとお会いして、『グラウンド・ゼロ』に関するお話に加えて、文明社会が偶然の結果であるというお話、文学が社会に出来る事は何かというお話など、様々なお話を伺う事ができた。

2018年3月16日 台湾研修6日目（原発、農業・食糧問題グループ）

日本台湾交流協会JETRO（2-1）

村永 宙哉

本日の午後、私たちは日本台湾交流協会の経済部主任、南澤さんと経済・貿易相談室長、宮越さんにお話を伺いました。私は主に台湾のエネルギー政策についてお話を伺いました。日本にとり、台湾は重要なビジネスパートナーであるほか、日本は近年原発の再稼働を進めているので、日本政府の立場にたった台湾のエネルギー政策に関する見解をお聞きできたことは非常に新鮮で有意義でした。今まで、反原発の視点から活動している方々からはお話をお伺いしてきましたが、今回はむしろ原発を支持している立場の方々からのお話もお伺いでき、学びに新たな視点がもたらされ、より重層的なものになりました。

・台湾のエネルギー事情

台湾は日本と同様、エネルギーのほとんどを輸入に頼り、2015年の海外依存度は98%に上る。また、石炭火力や原子力などの発電コストの安い発電方法を導入しており、再生可能エネルギーの導入割合は2015年現在2%にすぎない。台湾のエネルギー政策に関してだが、2025年までに原発を廃止した上で、再生可能エネルギー2割、石炭3割、天然ガス5割のエネルギーミックスを目指している。しかし、実現には多くの壁が立ちはだかるという。天然ガスの備蓄施設を拡大する計画の凍結や、送電網の更新の遅れ、再生可能エネルギーの固定買取価格の低さで代替エネルギーの導入が進まない。またそもそも台湾の電力システムは余力がない状況で、人為的ミスで火力発電所一箇所が稼働を停止したことから大規模停電が起きてしまった。余力が不足し、代替エネルギーの確保が難航している中、現在稼働中の3基の原子炉も含めて7、8年後に原発を廃止することで本当に電力が供給できるのか不安が残る。

・日本台湾交流協会の立場

① *台湾の原発政策について*

日本は台湾の方向性は否定しない。しかしフィージビリティーが前提とされるべき。台湾の電力供給は逼迫している。電力面での不安は台湾の産業・投資環境にも悪影響を及ぼすので、日本側としても不安要素である。せめて期限ありきではなく、先延ばしも選択肢に入れて欲しい。

② *日本はどのように関わっていくか*

日台は戦前から信頼関係ができている。日本統治時代は、良いこと悪いこと様々あったが、インフラなどの台湾の近代化のベースになったのは事実で、日本の高い技術は今も信頼されているので、日本企業は台湾において受け入れられやすい。なので、日本としては再生エネルギー導入などで技術的なアドバイスや技術供与をして台湾の政策を後押しして行きたい。台湾西岸にあるオフショア風力発電の建設に関しては、最近日立が工事を受注できた。

③ *台湾はなぜ脱原発に自信があるのか。*

福島第一原発事故の後日本のすべての原発を停止してもなんとかやっていけたと彼らが考えているからだろう。しかし、実際にはそれは誤解である。

④ *台湾の再生エネルギーの導入が進まない背景に、買取価格の低さがあるが、なぜなかなか上がらないのか*

これは、買取価格の高さが電力価格に反映されてしまい、買取価格が高かった場合に消費者側に負担が行ってしまうため。ただし、台湾政府としても発電事業者の新規参入を促すための施策を打とうとしている。

2018年3月16日 台湾研修6日目（原発、農業・食糧問題グループ）

日本台湾交流協会 JETRO（2-2）

高木 美咲

お忙しい中、丁寧な資料を用意してくださり、新鮮な内容のお話の後、自由に質問をする時間をいただいた。事前に下調べをしていた内容を元に、二人ともかなり深い質問ができ、有意義な時間を過ごすことができたように思う。私は特に、南澤さんからいただいた台湾経済概況についてのお話に関して、以下内容を箇条書きで申し訳ないが列挙させていただく。

・台湾経済の成長率は2%前後で概ね良好
・景気に関しては中国の影響を顕著に受けるという脆弱性はあるものの現在は安定傾向
・雇用動向は良好。問題点としては特にサービス業において給与上昇が見られにくいこと。よって、転職・起業が日本より見られやすい。
・商業施設に関しては、日本とは異なり百貨店の営業額が上昇傾向。
　また、コンビニも同様に上昇傾向にあり、国民一人あたりのコンビニ数は世界一。
・家庭消費に関しては食費が高く、季節の関係から衣服への支出が少ない
・産業に関しては　台北（日本だと東京）、新北（ベッドタウン）、台中（日本だと名古屋）、台南（日本だと京都）、桃園、新竹（台湾のシリコンバレーとよばれる）、高雄（最大の貿易港）などの都市ごとに特色に合わせた産業が分布
・人的往来に関しては訪日台湾人の人数が訪台日本人の人数を圧倒的に超過しているが、日台間の定期旅客便の便数が安定して多いこともあり（615便/週）関係は密接。
・貿易に関しては常に輸出超過、輸出相手国は中国が4割を占め、日本が2番目で7%、品目は半導体含む電子部品が33%以上を占める。輸入に関しては、品目は変わらず工業製品が多いものの相手国は中国、日本がそれぞれ20%前後で大きな割合を占める。台湾は日本産食品にとって香港、米国、中国につぐ第4位の市場であるが、品目については近年大きな変化が見られた。(従来は長らく1位タバコ、　2位りんご、3位さんごであった)
・日本企業の対台湾投資は年間400件超、新規参入については製造業は少なく、小売・サービス業が多い。7割以上の企業が黒字見通し。進出の目的としては可処分所得が多く、親日的でかつ消費行動が盛んな台湾人をマーケットとすること、言語・商習慣などにおいて中国進出の第一歩とすること、などがあげられる。対日本直接投資はその10分の1程度の30件程度、内訳は製造業が多い。なお、金額については大型案件により変化しやすい。
・台湾への投資の形態としては合弁または独資どちらも可能（参考：中国への参入は合弁のみ）
・台湾における3つの大きな課題は1.輸出依存 2.半導体依存 3.中国大陸依存であり、そのそれぞれに

関して民進党から政策が発表されているものの、実現は道半ば。

原子力関連の話題についても言えるが、台湾は政権によってカラーが大きく異なるので、先のことが予測しにくいのが特徴。台湾においては特に中国との関係において、政治状況と経済状況のパワーバランスの齟齬が多く見られ、日本側としてもその整合を保つのは難しい。しかし、この複雑さこそが台湾の面白さ、と南澤さんがおっしゃっていたのが印象的であった。地域、でありながらもアジアの中心部に位置し、日本との深い関係性から、経済的にもかなり影響力の大きい台湾の動向には、これからも注視していきたい。

2018年3月16日 台湾研修6日目（都市開発グループ）

文化創業区

大島 一武輝、平松 昴

3月16日の午後、華山1914文化創業区を訪れた。この地では日本統治時代に建設されたワイン工場や倉庫の中身を改装し、レストランやグッズショップとして利用している。青鳥書店もこの中にある。老若男女楽しめる施設があり、地元の人や観光客で終始賑わっていた。

華山1914のアートディレクター、林璞氏に貴重なお時間を割いていただき、歴史や現在の活動について教えていただいた。この地区は1914年から現在に至るまで「Wine & Camphor Factory」「Space Transform」「Art & Culture District」「Cultural & Creative District」「Citizen Park」という5つの段階を踏んできた（図1）。現在は「ミーティング」「展示」「パフォーマンス」「店」という4つの軸に基づき運営されており、学校かつステージかつ風景かつ本のような存在を果たしている(図2)。事実、華山1914を訪れる人々は増加している(図3)。中に入るショップは長くても5年で入れ替わり、非常にフレキシブルな運営だと言える。したがってミュージアムのような常設展は存在しない。中には一ヶ月弱で店が変わるというエリアも存在した。100年以上変わらない歴史的建造物とその中で目まぐるしく変化する内装の対比が面白い。区内にある烏梅劇場にも連れていっていただいた。そこではパフォーマーとともに劇を作るプロセスを学ぶワークショップが行われており、高校生や大学生が参加していた(図4)。15日に訪れた迪化街とは異なり、若者が集まるプラットフォームであることを重視して歴史的建造物を有効活用しているのが特徴である。横浜の赤レンガ倉庫を想起した。

最後に華山1914の将来像について伺った。制限であると同時に強みである歴史的建造物を今後も有効活用しつつ、東京など海外のアーティスト集団を招いてインターナショナルな競争を起こしていきたいと意気込みを語った。2020年にある東京オリンピックの時にはアジアのアーティスト集団による大規模なイベントを行う予定だそうだ。林氏の「オンリーワンかつナンバーワンの芸術地区にしたい」という言葉が印象的だった。

図 1

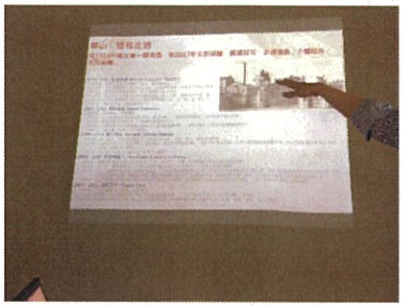


図 2

図 3

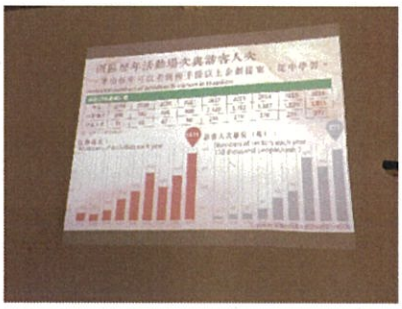


図 4

2018年3月16日 台湾研修6日目（ジェンダー・セクシュアリティ、憲法・人権・民主グループ）

台湾同志諮詢熱線協会（台湾LGBTホットライン協会）

青木 風香

婦女新知基金会が政党に入り込んで主に活動しているのに対し、台湾同志諮詢熱線協会は電話相談など主に草の根で活動している団体である。それは、同性愛者にとっては政治的問題以上に「仲間がいない」「恋人がいない」といった身近な問題の方が余程切実だからである。この団体は1998年、同性愛理由での自殺が社会問題になっていた頃に設立された。以下、業務について詳述していく。

まず最初の仕事はエイズ対策であった。当時は正しい知識が普及しておらず、「男性同士で手を繋いでしまったのだがエイズに感染する恐れはあるか」といった電話が相次ぎ、政府も何の対策もしなかったため、同志諮詢熱線協会が対応したという。

その他セクシュアルマイノリティの青少年や彼らを子に持つ親に対しても電話相談業務を行っている。前者に対しては定期的に交流会を開催して仲間と知り合ったり恋人を作れるよう手助けしたり、時には性別適合手術に関するレクチャーや情報交換の機会を設けることもあるそうだ。

次に教育に関してであるが、2004年のジェンダー平等教育法成立で一学期につき4時間はジェンダー平等に関する授業を行うことが義務付けられたため、LGBTホットラインが学校に入って活動することが可能になり、セクシュアリティについて悩みを持つ子供や、生徒に同性愛だと打ち明けられた教師らに正しい知識を授けられるようになった。しかし2016年以降同性婚成立が盛り上がりを見せる中、バックラッシュ団体が「同性愛教育は違憲である」との署名を提出するなどの反動も大きくなっているという。

また、DV問題にも取り組んでおり、DV防止法の「婚姻関係にある」という文言を「同居している」更には「交際中またはかつて交際していた」に改正させることで同性間でのDVにも対応できるようにした。

私が初めて知ったため特に興味深いと感じたのは以下の2つである。

1つ目は「老い」に関する活動である。活動を長く続けるにつれメンバーが高齢化し、恋人ができにくくなったり結婚できないまま歳を重ねたりすることへの不安が顕在化し、その共有のためにバスツアーを企画しているという。

もう1つは「肉弾甜心」という肥満体型への差別に対する反対活動である。人には自分が望む姿で生きる権利があるにもかかわらず社会の圧力によって肥満体型が恥ずかしいものであるかのように感じられてしまう。お話をお伺いした林さんは「同性愛も肥満も、すべてのマイノリティに対する差別は同じ構造をしている。だからセクシュアルマイノリティのプライドパレードでも原発反対など多岐に渡る主張をしている。」と述べていた。

これからの政治に期待することを尋ねると、パートナーシップ法などの代替措置ではなく民法の改正に

よる完全な同性婚の成立、及び同性間での国際結婚の成立を挙げた。

婦女新知基金会も台湾同志諮詢熱線協会もどちらもエリートが率いており、民主化の流れに乗って抑圧された人々の人権拡張を目指している点では同じだが、前者は法律の改正・制定、政策立案など主に上から社会を変えていくのに対して後者は電話相談を基礎にした草の根運動を中心としているため、上手く役割分担ができており、スムーズな活動の促進ができていると感じた。自民党を始めとする保守派の力が根強く中々LGBT の権利伸張に関する法整備が進まない日本とは大きな違いが存在する。

2018年3月16日 台湾研修6日目（ビジネス、都市計画、原発グループ）

新境界文教基金会

小林新九郎

第6日、2つ目に訪れたのは、新教会文教基金会という民進党系の政治系シンクタンクだった。

まず、台湾の都市及び農村の開発について、簡単に説明してくださった。この分野において、台湾は10年前の日本の問題が遅れてやってきているのだという。主なものに、少子高齢化と都市部での人口過密である。これに対して政府は色々な政策を打ち出しており、例えば若者への住居・資金・仕事探しなどの面での援助、日本統治時代に作られたインフラ設備の改善、鉄道の整備などである。その中で、地方に住民が移住することを支援するため、地方創生の一環として農業の魅力アピールや老人介護の政府による補助があげられていた。

この内容については、日本の政策を参考にした例はあったか、日本の代表的な地方創生政策である「ふるさと納税」についてどう考えているか、といった様々な質問が寄せられた。地方創生に関する政策については台湾は日本を参考にしていることが多いが、ふるさと納税については台湾の税収が日本よりも少ないため、導入する見込みはないだろうという。また、九州大の学生から、日本では地方創生のために都会から地方に帰る学生に対して地元の住民が冷たいことが多いという意見が寄せられると、台湾でも同様のことが起きていると述べられ、日本と台湾の新たな類似性の共有がなされた。

次に、台湾のエネルギー、特に電力に関する問題についての政策の議論があった。ここでも台湾と日本の課題の類似性が強調されていたが、2025年までの「LNG50%、石炭30%、新エネルギー20%」という目標は、原子力を継続して利用しようとしている日本と大きく異なっている。

これについては、原子力について調べている東京大のチームから、この目標は達成できそうか、またエネルギー源の多くを海外から輸入する単一の資源に頼ることは危険ではないかとの指摘があった。回答として、新エネルギーの割合増大が難しいためにLNG中心に一時的にシフトするであろうこと、そしてエネルギー依存の安全性については輸出国の分散と備蓄増加によって担保するであろうことを教わった。

最後に、台南で長らく働いていた経験に基づく地方創生の具体例を教えてくださった。台湾では、地域の発展において必要な事業と住民が求める事業に差があるために、選挙で得票数を稼ぐため不必要な事業に資金をつぎ込んでしまう例があり、地方行政と住民の話し合いが必要であるということであった。また、旧来の荒れた建築を昔のテイストを残しながら現代風にアレンジするという、台南の古都ならではの地方創生についても解説され、様々な地方創生の在り方について理解が深まった。

2018年3月16日 台湾研修6日目（都市計画グループ）

青鳥書店 Bleu&Book

富澤 郁美

華山の芸文特区で1番新しい建物。もともとスターバックスの倉庫であった。

もともと、店長さんはほかの地方で本屋をやっていた。そこはすごく有名で北京のテレビが来たこともあった。依頼があり、もう一個店舗を開くことに。出店場所を決めるにあたって、店長さんが1番気に入ったのがここの倉庫。天井が高いこと、青と白のコントラストが見えるところ、イベントができるところがいい点。

・本とイベントはメディアがコンセプトだと思っている

いろんな専門の人を10人(台湾では有名な人)探して本を紹介してもらった。その人をインタビューしている感じになるように本が展示されている。全冊が見えるように、興味を持てるようにする配置を心がけている。

・どこから写真を撮ってもきれい

売り上げもすごくいい。1ヶ月1/4の本が売れるぐらい。チェーン店じゃないところだとかなり売り上げが良い人。華山自体はすごくにぎやかだけど、ここのお店は静かに読書できる。

1年に100回ほどイベントを行っている。(今夜は絵本のイベント) コーヒーもとてもこだわりを持って作っていて美味しい。台湾で1番の豆と有名な産地の牛乳を使っている。

・客層としては、18歳～40歳の若い世代が多く、男性よりは女性が多い。

・日本の作家も来てインタビュー受けている(野島剛さん)。

以下は、店内の説明。

・入り口:建築(最近京都の本を書いた人)

・店長さんが書いた本もある。(今月からサイン会がある。香港とシンガポールもいく)

・宮沢賢治が店長さんのオススメ(銀座の本屋で見つけて送ってもらったほど気に入っている。)

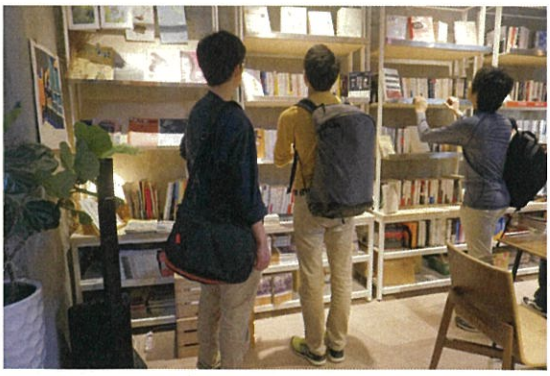
・壁の棚:社会学の有名な先生が選んだ本

・その下の机の上:音楽の本

・中央の左:毎週テーマがあり、それに沿った本を置いている(今週は台湾の歴史について)

・大きな本屋では買えない雑誌も置いている。戦争や政治についての難しい本もある一方で3-40年前のCDジャケットが表紙になっているような本もある。

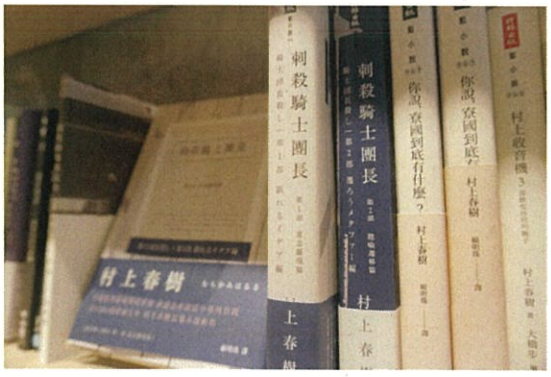
・赤の棚:政治に関する本。故宮に関する有名な本もある。(映画化されている)
・奥左真ん中・中央裏:デザインの本。わびさびについての本もある。

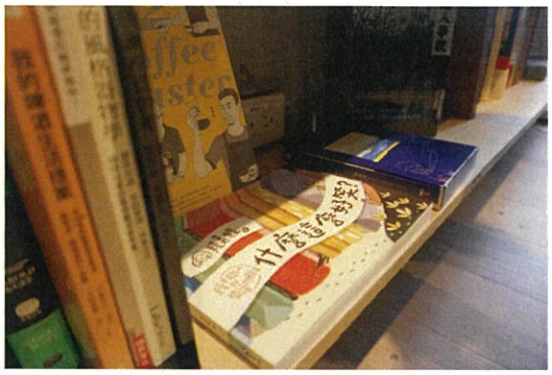


・奥左:地方の雑誌

・」週刊編集:100元。去年から始まった。

・日本の本の棚(上は外国の本、下は絵本)





・その左:食に関する本

2018年3月17日 台湾研修7日目（全員参加）

台湾人学生との交流会

高木 美咲、李 子卿

本日は午後2時から、台湾大学第二活動センターにて日本人学生と台湾人学生の交流会が行われました。タイムターブルは以下の通り。

14:00-15:15 台湾大学学生の発表
15:30-16:15 東京大学学生の発表
16:15-16:30 団体写真
17:30 懇談会（熱翻天生猛海鮮）

企画は台湾側の学生が行い、途中プロジェクタートラブルなどがあったものの、概ね円滑に進められた。台湾側の学生はかなり多く参加してくださり、友達を増やすとてもよい機会となった。
台湾大学の人の発表は、「日本統治時代に戻る」をテーマに『生活』『社会』『経済』のなどの話題が取り上げられた。

『生活』に関しては入試制度や寮生活、制服、娯楽など、『社会』に関しては現代化のプロセスや婦人による社会運動、人権、『経済』については米と砂糖の生産流通についてのプレゼンが行われたPPTの使用言語は中国語で、学生の口頭発表は日本語で行われた。適宜ディスカッションの時間が設けられ、班ごとに分かれて台湾大学・淡江大学・九州大学の学生たちとともにディスカッションが行われた。代表者が前に出て発表を行う場面も見られた。台湾側の学生の日本語レベルはまちまちであったが、適宜英語を用いるなどして円滑に会話ができたのがとても良かった。

東京大学側の発表も『生活』『社会』『経済』の3つを軸にして，これまでのフィールドワークを通して学んだこと，感じたことをリレー形式でプレゼンを行った。『生活』パートでは原子力発電と農業について，『社会』パートでは政治問題，社会問題に対する学生運動について，そして『経済』パートではビジネスと都市開発について，日本と台湾を比較しながら発表を行った。各パートで1~2個の問いを提示し，発表後はその問いについてのフリーディスカッションを行った。台湾の学生の中には各分野に詳しい学生がいて，台湾で実際に暮らしているからこその生の意見をたくさん聴くことができた。これまでのフィールドワークでお話を伺ってきた方々とはまた違った視点からの見解を知ることが出来たので，とても得るものの多いディスカッションだったと思う。

交流会後の懇談会では，食事をしながら交流会とは打って変わってよりフランクな話題で盛り上がった。普段の生活のことや将来の進路などについて，自分とは異なる環境で生きてきた同年代の話を聴くのはとても有意義だった。

以上